

「東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学部 言語学専修 3 回生 前橋優子

○プログラム内容

3 日間のフィールドトリップと 2 日間のワークショップを行った。フィールドトリップは博物館見学などに加え講義を聴くこともでき、韓国社会を多角的にとらえることのできるものであった。ワークショップにはオブザーバーとして参加し、発表者のプレゼンテーションを聞いてアジアの社会現象や社会問題に対する理解を深めた。

○プログラムにおける経験など

東アジアジュニアワークショップは非常にショックを受けた 5 日間だった。率直に言えば、日本人の英語力の低さを痛感したからである。発表者ではないが、自分もそのうちの一人なのだと思うと悔しい気持ちになった。韓国・台湾の学生が私たちよりはるかに高いレベルの英語力を持っていることを知り、もっと積極的に英語の勉強に取り組まねばならないという危機感を持った。自分の生活を見直し、英語を使うことを意識した学習とは何かを考えたいと思った。

前半の 3 日間のフィールドトリップは宗教や歴史などに焦点を絞ったものであり、休日に自分で赴いたときは違った視点からソウルをとらえることができた。特に、韓国社会は様々なものが混在する社会だという印象が大きかった。歴史的建造物と近代建築が対峙する街並みやモスクと教会が隣接する地区などを見学するなかで、あらゆる思想や民族を包含しながらも、そのうちに異なる価値観のせめぎ合う非常に複雑な社会の様相を見たような気がする。

後半のワークショップは社会学に関連したテーマであり、自分の知識では詳しい背景の理解にまで及ばないものもあったが、同世代の学生が興味を持って調べたテーマなので面白く聞けるものが多かった。それぞれの国の社会現象や社会的な問題になっていることが取り上げられていたが、その中でも日本でも同じ現象が起きているものや、他方まったく新しい概念もあり、どのプレゼンテーションもとても新鮮に感じた。プレゼンの方法もそれぞれに個性があり、内容や話の流れ、発表態度など今後自分がプレゼンテーションを行うための参考にもなった。

○今後の学習・進路について

このワークショップへの参加は自分の生活と学習を見直す良いきっかけになった。当座の目標として、まずは自分の英語力を伸ばしたいと思った。同時に日本における英語教育にも関心を持った。日本と韓国の学生にこれほどの英語力の開きがあるのは、個人の努力だけではなく教育法にもその原因があると考えた。今後は英語の教員になることも視野に入れつつ日本の英語教育の現状の把握し、これからの英語教育の在り方を考えたいと思った。